

博士論文審査結果の概要

| | | | |
|--|-------|----|--------------|
| 申請者氏名 | 木下 光弘 | | |
| 審査委員会主査 | 職名 | 教授 | 氏名 |
| | | | ボルジギン ブレンサイン |
| 論文題目 | | | |
| 中国：ポスト文化大革命期の民族政策—ウランフ（烏蘭夫）と華国鋒を中心に— | | | |
| 論文の内容の要旨および審査結果の要旨 | | | |
| 【博士学位請求論文の要旨】 | | | |
| <p>本論文は、中国における「ポスト文化大革命期」の少数民族政策について論じたものである。具体的には、現代内モンゴルの設立者であるエスニック・エリートのウランフ（烏蘭夫）の政治的デュアル性と「文化大革命」を事実上終息させた当時の中国の最高指導者である華国鋒の少数民族問題に対する取り組みを通して考察したものである。</p> <p>今日の中国における経済発展のスタートラインを1978年から実施された「改革開放」政策の実施であるという認識が一般的であり、「文化大革命」の後期から「改革開放」政策の実施までの期間に対する定義づけが必ずしも明確にされてきたとはいえない。それに対して、本論文は「文化大革命」の混乱が事実上終息に向かった1969年以降から「改革開放政策」が実施される1978年までの期間を「ポスト文化大革命期」と称し、その期間における中国全体の秩序回復を少数民族政治の混乱收拾を中心に考察した。このような「ポスト文化大革命」という観点は「文化大革命」という時代を多面的に捉えようとするものであり、それによって、「文化大革命」による混乱からの建て直しの「萌芽」を読み取り、次の時代へとつながる動きを見出すことが可能となった。</p> <p>少数民族政策における「ポスト文化大革命」性を象徴するのがエスニック・エリートであるウランフの早期の復活であった。モンゴル族出身のウランフは中国共産党の創立期のメンバーでありながら「内モンゴル人民革命党」の創立にも関わるという二重の身分を持つ特殊な存在である。彼はモンゴル族であるもののモンゴル語が話せず、1920年代にはソ連に留学し、1947年には現在の内モンゴル自治区の前身である「内モンゴル人民自治政府」を創立させた人物だが、「文化大革命」がはじまる（1966）と失脚した。しかし、彼は</p> | | | |

1971年に軟禁から解かれ、1973年にはいち早く党中央委員に復帰する。そこには、ソ連と冷戦状態に陥り、辺境地域の秩序回復が急務となっていた状況から、内モンゴルはもとより少数民族問題に影響力を持っていたウランフをもって「文化大革命」の混乱收拾をはかろうとした中国共産党の意図がうかがえる。ウランフはその後全国人民代表大会の副委員長や中国共産党中央統戦部部長、そして国家副主席にまで昇りつめ、少数民族出身の幹部としては国家最高指導者の地位につくことになる。

一方、毛沢東死後の中国で最高指導者となっていた華国鋒については、間もなく鄧小平によってその地位が取って替られることもあって、その政治的影響力は低く、とりわけ少数民族問題に明るくないと今まで見られてきたが、本論文はウランフとの関連も踏まえて華国鋒の民族問題に関する活動を丁寧に考察した。華国鋒は最高指導者になる以前の1975年からチベット自治区と新疆ウイグル自治区を前後にして訪問し、その後ウランフを統戦部の部長に抜擢するなど「文化大革命」の混乱收拾作業として民族問題を重視していたことが明らかになった。

【審査結果の要旨】

人類史上最悪ともいわれる中国の「文化大革命」に関する研究は、まず中国国内で禁止されており、諸外国においてもその被害実態に関する研究が行われているに過ぎない。そうした状況の中で、本論文は近年内モンゴル地域における文化大革命期の史料公開など先行研究を充分活用しながら、「文化大革命」が事実上終息した1970年代の状況を「ポスト文化大革命期」とする新しい枠組みを提示しながらエスニック・エリートであるウランフの処遇やこの時期の最高指導者である華国鋒による民族問題への取り組みに対する分析を通して、今まで見られなかった1970年代における中国の少数民族問題に関する新しい見知を提示した。それは現代中国研究の領域においても、現代中国の少数民族問題研究領域においても、そして内モンゴル研究においても重要な意義を持つものである。

審査委員会は平成31年2月1日に本人による学位請求論文の公开发表と論文に対する試問を行った結果、博士（学術）の学位論文として学術的意義のあるものと認め、博士（学術）の学位論文として合格と判断した。